

## 写真がつなぐ日本とイギリス

清水 由布紀

### 1. はじめに

19世紀半ばに江戸幕府から明治政府に変わった日本は、積極的に西洋文化を取り入れた。明治政府は「雇い」と呼ばれた技術者たちを外国から呼び寄せる一方で、留学生を海外に派遣した。このように日本と海外の行き来が増していく中で、写真もこの時期に日本にもたらされることになる。本論では初めて写真術の習得のために渡米した留学生である小川一真（1860-1929）を中心に、写真術がどのように日本と海外、特にイギリスとつないでいったかを考察する。

### 2. 小川一真と海外に向けた目

小川一真は旧千円札の図案にも使われた夏目漱石（1867-1916）の写真が収録された『漱石寫真帖』（1912）を出版した写真家で、写真家として初めて洋画家の黒田清輝（1866-1924）と同時に帝国技芸員に選出された人物である。小川は日本の写真家であるが、その目は常に海の外を向いていた。彼は海外向けの写真集を出版し、日本の風景や人物、花を撮影し、日本語だけでなく英語で題名を付けている。また写真集だけではなく、英語でつづられた忠臣蔵の物語に写真を提供し出版しており、明らかに彼の作品は英語圏の人々を読者に想定している。そして彼が清朝末期の紫禁城を撮影した作品は自ら大英博物館や様々な国の大使館に寄贈しており、授与された御礼状や勲章の一部は現在では行田市郷土博物館に所蔵されている。

彼は高い技術力に定評があり、1893年のシカゴ万博では「万国写真公会」の評議員として派遣された（小澤 101）。『Some Japanese Flowers』（1894）はアメリカのゲッティ博物館で2013年に復刻版が発売されているが、これは彼の作品が海を渡り、今もなお評価されている表れである。彼はウィリアム・バルトン（William Kinninmond Burton, 1856-99）など外国人写真家が撮影した作品の印刷を担当しており、外国の専門家さえ信頼する技術を持っていた。

これは彼が確かな技術を持っていたからだけでなく、小川に日本の外に目を向ける意識があったからだと考えられる。このような海外を意識した思考は、カメラとの出会いから始まっていたかもしれない。小川は14歳のころイギリス人教師ケンノンからカメラの存在を教えてもらい、英語の教科書として『写真術の手順と方法』（*A History and Handbook of Photography*, 1876）という本を寄贈されている（小澤 30-31）。その後一度は富岡で写真館を開設したものの、海外で写真の技術を学ぶため、築地大学校（通称バラ学校）という英学の学校に進学し、船乗りとしてアメリカ軍艦に乗り込み渡米を果たす（小澤 32-36）。

この留学は、この先写真家として活動するにあたり必要不可欠である二つの重要なものを小川にもたらした。その一つは最先端の高い技術である。彼は渡米後写真館で住み込みをし、講習料

を払いながら働いた。そして彼は身につけた技術を記事にして、友人である二見朝隈(1852-1908)の朝陽社が発行している『寫眞新報』に寄稿した。朝陽社は後に社員の横領から経営が傾くが、小川は同誌を復活させている(小澤 55-57)。彼は私費留学生で、留学当初は朝陽社からの原稿料で生活などを賄っていたことを考えると、雑誌に掲載できるような技術を身につけるということは生活基盤に影響する重要な業務だと言える。そしてそれを、記事を通じて伝えるという経験は、彼の帰国後奔走した日本における写真の地位向上を目指す活動の原点のひとつだと考えられる。

もうひとつ留学の成果として重大だったのは、小川が人脈を得たことである。当時多くの留学生が、藩などが後ろ盾になった公費の留学生だったのに対し、小川はそのような援助のない私費留学生だった。彼は写真館で週に\$3.50 稼ぎながら写真術を学んだが、実習費も足りず、材料費にも事欠き、朝陽社の破綻がそれに追い打ちをかけた。しかし小川は公費で留学していた友人の伝手で、華族である岡部長織(1855-1925)から支援を得ることが出来た。岡部自身も写真をたしなんでおり、帰国後もながら小川の写真活動を支え続けた(小澤 55-61)。

1871年に太政官は華族に対し「親ク中外開花ノ進歩ヲ察シ見聞ヲ広メ智識ヲ研キ国家ノ御用ニ被為充候御趣意ニ候条各奮発勉勵可致事(文部省 103)」という留学の勅諭を下している。彼らは国民の手本として、日本国内外の進歩を見聞し、知識を深め、それを国家のために使うことを求められていた。つまり、外国に関する知識や文化を身につけることは、国をあげて進められており、それは華族のような上流階級が窓口になりその下の四民に紹介される形をとっていたのである。岡部のような公費の留学生は将来の官職候補であり、実際岡部は帰国後英国公使館参事官に任命され、1890年には貴族院議員になっている(研谷 67)。小川は戊辰戦争で敗北した旧忍藩出身で、公的な支援もなく、留学中はその日の暮らしさえままならない状況であったが、留学生のコミュニティに入ることで、将来の官職候補であるエリートたちと関わりを持つことが可能になった。そして上流階級と関わりを持つことにより、より多くの資金と研究する機会を手に入れることができたのである。

1898年に岡部は「官民間はず、政党政派を論ぜず、職業を分かたず、異種の融資を結合し、其交際を親密にし、且つ外国人と通交の便を計る事(日本倶楽部 13)」を目的とした「日本倶楽部」を結成する。このクラブの会員には小村寿太郎(1855-1911)、澁澤榮一(1840-1931)、森有礼(1847-1889)などの著名な議員、官僚、財閥が名を連ねているが、発起人の一人として小川の名が記されている(日本倶楽部 13-14)。一写真家が、このように肩を並べることができたのは、会長であった岡部の働きがあったからこそであると研谷は指摘している。このクラブのおかげで小川は政財人たちと個人的な交流も持てるようになる。これは西洋で身につけた技術で写真家として活動する資金を獲得することにつながるだけでなく、日本における写真家の地位向上につながった。

留学は小川にもう一つ重大な出会いをもたらしている。1887年小川は写真の技術と堪能な英語が買われ、アメリカから来た調査団に同行し101年ぶりに起きる皆既日食を写真に収めるという命をうけた。その撮影会に参加していたのが、東京帝国大学教授であるウィリアム・バルトンである(小澤 77)。バルトンは多くの人々に写真の指導をしてきたが、年の近い小川とは、英語を話せることもあり、特に親しかった。

バルトンはイギリスの *The Practical Photographer* 誌にて小川の半生について記事を書いている。この“A Japanese Photographer: The Difficulties That Had to Be Overcome in Former Times

in the Land of the Rising Sun” (1913) では、小川は父が明治維新で地位を失った “the proud military class” で、多くの ‘Young Japan’ が西洋に目を向け、西洋文明を熱心に取り入れた時代に写真術を身につけ、乾板製作所をつくり、“he actually reached his goal (Burton 63)” と描かれている (Burton 63-64)。明治維新という旧体制からの変革により、旧体制のままだったならば得られていた恩恵をなくした少年が、写真という西洋技術に出会うことにより立身出世するという話になっており、啓蒙主義的な枠で小川の半生が語られている。ここでは西洋と日本の一方向的な関係である印象を与えるが、必ずしもそうとは限らない。

バルトンは、日本初のエレベーターを搭載した 12 階建ての当時日本で一番高い建物である凌雲閣を設計した。1890 年に一般公開されたこの塔は、東京の労働者向けの商業娯楽施設で、最上階は東京が一望できる展望階になっており、望遠鏡まで設置されていた (Checkland 182)。小川は凌雲閣に人を呼びこむために、芸者の写真を凌雲閣に展示し、人気投票を行った。そしてその写真をもとに作った『東京百花美人』 (*Types of Japan Celebrated Gaisha of Tokyo*, 1895) という写真集は、東京土産のひとつになった (行田市郷土博物館 66-68)。小川はバルトンの塔を訪れる人々を増やしつつ、自分の作品を披露し、客も楽しめるというバルトン、小川、客の利害をアイディアで一致させている。このように小川はバルトンと協力することにより、写真の新しい楽しみ方を模索することができた。これは双方向的な関係である。

バルトンは岡部のように、人との接点を作った。例えば、バルトンの友人である鉱山技師、地震学者であるジョン・ミルン (John Milne, 1850-1913) は、1891 年に濃尾大地震が起きた際、バルトンだけでなく小川も引き連れて現地に向かっている。そこでとった写真は *The Earthquake of Japan, 1891* (1892) という写真集にして出版された (小澤 95)。小川は著名な建築家であるジョサイア・コンドル (Josiah Conder, 1852-1920) とも交流があった。コンドルが河鍋暁斎 (1831-89) の作品集 *Paintings and Studies by Kawanabe Kyosai* (1911) を出版する際には、小川は暁斎の作品を提供し、作品の撮影も担当した (Conder viii)。またコンドルは本多錦吉郎の『図解庭造法』 (1890) を英訳し *Landscape Gardening in Japan* (1893) を上梓した。その補遺として実際の庭園を解説した *Supplement to Landscape Gardening in Japan* (1893) でも、小川は各庭園の写真を提供している。このように小川はイギリス人の著作物において視覚的な部分を担当することができた。

小川は自分の作品だけでなく、日本にきた外国籍の著者の著作の出版にも携わっており、バルトンははじめ、夏目漱石の英語教師であったジェームス・マードック (James Murdoch, 1856-1921) や、イギリス人写真家のハーバート・ジョージ・ポンティング (Herbert George Ponting, 1870-1935) の日本に関する著作でも写真の印刷を担当している。小川が製版した写真集の多くは大和綴じで製本されており、絹糸でとじられた日本らしい外観は日本旅行者にも好まれた。同じ写真でも、掲載されている形式が変わるだけで印象がかなり変わってくるのが見て取れる。

小川はバルトンが言うように西洋がもたらした技術を身につけただけでなく、その技術を西洋に向けた作品に使っている。つまり西洋で身につけた技術を西洋に提供しており、写真技術において日本と西洋の間で単に与えられるだけではなく、与えてもいるのである。バルトンと東京帝国大学教授であるチャールズ・D・ウェスト (Charles Dickinson West, 1847-1908) は小川を英国王立写真協会の会員に推薦する (小澤 93-94)。小川の技術の評判は主に日本に住んでいる外国人に広がり、またそれは英国王立写真協会というイギリス本土にも繋がっていくこととなる。



### 3. 日本写真会と外国写真展覧会

1889年、小川はウェストを発起人として、日本初の写真団体である日本写真会を立ち上げる。会員は、写真家の鹿嶋清兵衛(1866-1924) 写真用具を取り扱う商会を営む浅沼藤吉(1852-1929)、理学博士の菊池大麓(1855-1917)などがいた。またバルトンや、横浜写真で名を馳せ、外国人としては最大規模の写真館を持っていたアドルフォ・ファルサーリ(Adolfo Farsari, 1841-98)、横浜で写真機材の輸出を取り扱っていたコッキング商会のサミュエル・コッキング(Samuel Cocking, 1845-1914)など会員の4割近くは外国籍で構成されていた(岡塚 481-82)。会誌も日本語と英語の両方で書かれている。これにより小川は、西洋との交流を個人だけではなく団体へ広げていった。

1893年に発行された『寫眞新報』では写真の認識について以下のように述べている。

日本に於いて寫眞術は冷遇を受けり。寫眞術其ものは固もと高尚なる技術なるも一般之を以て野鄙なる一手術となし従て、數年前までは上流人士の中に此術を弄する人少なりしは人々の知る所にして、一二常に之を以て遺憾となせし人ありしも、當時の風潮に押されて其意見を張る能はらざり。しか二三年前よりは時勢漸く變遷すると共に日本寫眞會の設立ありて、寫眞術は大に真面目を世に示すを得て茲に漸く其好氣運に向ひ上流人士の間に又學士技師の間に廣く此術の擴まるを見るに至れり(寫眞術の位置 73)(句読点は筆者による)

写真は日本では「野鄙」であると考えられ、上流階級でも写真に携わる人々は少なく、たとえこれを遺憾と思ってもそれを言える風潮ではなかったという。写真が日本に来たばかりのころ、東京や横浜の写真師は繁華街に店を開き、中でも内田九一(1844-1875)は、日本初の写真家として知られる下岡蓮杖(1823-1914)と共に好評を得て、その繁盛ぶりは「内田古一写真ノ姿画名代世話狂言」という題目で上演されたほどである(小澤 31-32)。しかし写真の機材や薬剤は当時とても高価なもので、ある程度の資産をもつ人物でない限り手に入れることができない。よって裕福層である上流階級から「野鄙なる一手術」というイメージを払拭することが写真の発展において重大な課題だった。

1883年に乾板撮影に成功し、1888年には宮内省臨時全国宝物取締局古社寺宝物調査で写真が採用されるなど、技術の進歩と公での登用を経て、写真は西洋から来た珍奇なもの、外国人向けの土産を脱却した「真面目」なものになっていった。その潮流の中、日本写真会は設立した。同年に『國華』という岡倉天心(1863-1913)と高倉健三(1855-98)が中心となって制作した美術雑誌が創刊されている。これは日本初のコロタイプ印刷を使った美術雑誌で、小川が写真を担当している。同時代の写真に関する雑誌である『寫眞新報』が一冊15銭程度だったのに対し、『國華』は1円と大変高価であった。この雑誌では日本画、仏像、陶器などあらゆる美術を取り上げており、執筆者には岡倉の他にもアーネスト・フェノロサ(Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908)や、ウィリアム・ビゲロー(William Sturgis Bigelow, 1850-1926)などの居留外国人も携わっていた(小澤 85-86)。ビゲローは日本寫眞会の副会長であることから『國華』が日本寫眞会と関りを持っていたことがわかる。つまり日本における写真は日本写真会を通じ、流行りものから芸術へのつながりを持ち、同時に富裕階級の関心を引いたのである。写真は勅諭にあったような「国家ノ御用」充てられる「中外の開花の進歩」からくる「知識」として、大義名分をもって上流階級に親しまれるものになっていった。

日本写真会は「外国写真展覧会」を開催している。この展覧会はイギリスのカメラクラブ (Camera Club) からの写真 296 点を中心に、アメリカや中国など、外国からの作品における日本初の写真展覧会である。この展覧会は明治天皇の妃である昭憲皇太后が表敬しており、写真が上流階級にとって「真面目」なものであることを印象付けた。

『寫眞新報』はこの展覧会の功績を二号にわたって2つあげている。ひとつはイギリスの写真の進歩を間近に見るできたことである。特に鶏卵紙印刷が主流だった日本で、ブロマイド印刷の作品群は話題になった。この雑誌の編者である小川は、ブロマイド紙による現像は「皆黒色に現像させるが故に一は艶麗にして美なるも高尚ならず 又一は所謂冷色になるが故に妙味を存ぜず」と考えていたが、展覧会の作品を見て「想像せる所よりも其変化の区域の広さを悟るならん」という感想を残し、イギリスの作品は「図案といい技術といい実に好模範となすべきなり」と述べている (外國寫眞展覧會 49-50)。もう一つの功績は「図案」の「模範」を示したこと、つまり写真の美術性を高く示したことである。『寫眞新報』はこの展覧会の作品を「専ら美術上の點に注意せるものにして近来日本に於て技術の進歩せると共に美術上の思想を寫眞家中に起こせしむるは最も善き方便なり」と主張している。

この展覧会に尽力した鹿島清兵衛は、この会から新しい写真研究会を設立することになる。徳川篤敬侯爵を会長としたこの「大日本写真品評会」には、横浜写真で有名な写真家の日下部金兵衛や、日本写真会の会員である浅沼藤吉、バルトン、岡部がおり、華族は皆名誉会員になっている。そしてこの名誉会員の中にはのちに設立する華族による写真同好会である「華光会」の会員もあり、岡塚章子はこの会が発展して「華光会」になったと推測している (岡塚 484-85)。華光会は『華影』という同人誌を発行しており、会員が撮影した作品が掲載されている。そしてそれを評価する「印画評」を担当したのが、小川と、東京美術学校教授でもある洋画家の黒田清輝 (1866-1924) である。黒田は写真においては素人だが、彼の作品にみられる自然へのまなざしが、風景写真を撮るための指針になると考えられたという (田中 468-69)。このようにして、海外写真展覧会は写真の美術的価値を用いて評価される契機となり、その業績は、上流階級を中心に影響を与えた一方で、美術的価値観の実践を促した。

この展覧会は日本の写真界に大きな影響を与えたが、ここで注目したいのが、この企画が、ロンドンのカメラクラブの要請によって行われることになったという点である。実際は輸送代、会場料、額縁代などは日本写真会が負担をしており、実質的には日本写真会がカメラクラブの写真を借りて展示をしている。会員からもその費用の多さから、資金不足を懸念する声があがったほどだが、入場料を設け、不足分を写真会が補うという形で展覧会は敢行された (寫眞展覧會 4-6)。

『寫眞新報』では度々イギリスの *Photographic Journal* 誌から最新の技術や製品に関する記事を引用しており、当時の写真家や愛好家が、イギリスは写真の最先端をいていたというイメージを持っていた可能性は高い。そのイギリスから作品を公開する場として日本を選んだということは、日本の写真会の自信に繋がり、重い負担を引き受ける価値があったと考えられる。

また『寫眞新報』は、「廣く公衆の縦覧を許し益寫眞術の進歩を謀る」ためにこの展覧会は開かれており、会員以外に写真が「高尚に趣ける」ものだと知ってもらう方法だと述べている (寫眞展覧會 4)。この展覧会は写真の地位向上を図るとともに、写真の「高尚」さを「公衆」に広く伝えることが意図されており、エリート階級とそれ以外の階層の両方にアピールをしている。入場料を設けているため観覧者はある程度限られてしまうが、それでもなお入場料を払えば誰でも

も最先端の写真に触れることができるという点において、この展覧会は、上流階級を中心にたしなまれていた西洋文化を民衆に伝えるという役割を果たしていると考えられるのである。

#### 4. さいごに

写真技術を習得するために渡米した小川は、官職が約束された公費での留学生ではなかったが、留学することによりエリート層とつながりを持ち、西洋技術を身につけるという勅諭に沿ったものとして日本における写真の地位向上に貢献した。彼の経歴をバルトンが西洋からもたらされた恩恵で立身出世する‘Young Japan’の一例としてイギリスに紹介したが、彼は身につけた技術を西洋の書籍に活用しており、写真術における日本と西洋の相互的な関係を築いている。

また彼は留学で磨いた英語で居留外国人とも交流し、写真技術と海外へ向ける目を養った。彼はこの人脈を生かし「日本写真会」を発足する。日本写真会は写真の地位向上を目指しており、「外国写真展覧会」では、日本の写真技術と芸術性の向上を促し、上流階級を中心の写真という西洋文化を公衆に伝える啓蒙的役割を果たした。この展来会はイギリスからの要請という体で、実質的には日本がイギリスの作品を借り入れて展示をするものであったが、日本とイギリスを結ぶものだったことは間違いがない。

イギリスとつながるということは世界の窓口とつながるという意味もある。日本を訪れ小川と日本の写真集をつくったポンティングだが、その後南極観測基地に行った際、彼は隊員に写真をスライドで見せながら日本に関する講義を行っている (Riffenburgh 75-76)。写真がつかない日本とイギリスとの線が、二国だけでなく世界へ越境していったのである。

## 引用文献

### 一次文献

- Burton K. William. "A Japanese Photographer: The Difficulties that had to be Overcome in Former times in the Land of the Rising Sun." 小川同窓会.『創業記念参十年史』小川一真出版部, 1913. 63-64.
- Conder Josiah. *Paintings and Studies by Kawanabe Kyosai*. Tokyo: The Maruzen Kabushiki Kaisha, 1911.
- 「外國寫真展覽會」『寫真新報』45 (1893): 25-26.
- 「外國寫真展覽會」『寫真新報』46 (1893): 419-20.
- 「寫真術の位置」『寫真新報』47 (1893): 73-74.
- 「寫真展覽會」『寫真新報』44 (1893): 3-6.

### 二次文献

- Checkland, Olive. "W.K.Burton, 1856-99: 'Engineer Extraordinaire'." *Britain and Japan: Biographical Portraits*. Ed. Hugh Cortazzi. Vol. 4. Oxford: Routledge, 2013. 174-86.
- Riffenburgh, Beau and Liz Cruwys. *The Photographs of H. G. Ponting*. London: Discovery Gallery, 1998.
- 岡塚章子「明治期の写真団体と華族—小川一真の事績からの考察—」『美術研究』第412巻, 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所, 2014. 479-90.
- 小澤清『写真界の先覚小川一真の生涯』近代文藝社, 1994.
- 行田市郷土博物館 "Types of Japan Celebrated Geisha of Tokyo" 行田市郷土博物館『第14回企画展百年前に見た日本—小川一真と幕末・明治の写真』行田市郷土博物館, 2000. 66-68.
- 田中淳「黒田清輝宛小川一真書簡の翻刻と黒田清輝の写真観」『美術研究』第412巻, 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所, 2014. 468-78.
- 研谷紀夫「岡部長職関係書簡にみる小川一真と岡部長職の交流と人脈」行田市郷土博物館『行田市郷土博物館収蔵資料目録小川一真関係資料目録』行田市郷土博物館, 2013. 66-80.
- 日本倶楽部『日本倶楽部百年史』日本倶楽部, 1999.
- 文部省『学制百年史』帝国地方行政学会, 1981.